

## 新年のご挨拶 「木を見て森を見る」

林産試験場長 松尾 博



平成 25 年の新春を迎え、皆様に謹んでご挨拶申し上げます。

新しい年を迎え、林産試験場の役割、目標などについてあらためて考えてみたいと思います。林産試は北海道立総合研究機構（道総研）の一員として再スタートを切り、早くも 3 年近くを迎えます。この道総研のホームページには研究職員データベースというコーナーがあり、各研究本部職員の研究分野や自己 PR などを閲覧することができます。自己 PR は各人の個性が反映され、なかなか興味深い記事も見られます。皆さん、是非ご覧いただきたいと思います。（<http://www.hro.or.jp/database/index.html>）

さて、このデータベースを作成するにあたり、場長という立場上、研究員に速やかな記入をお願いしていたわけですが、自分が何も書かないというのはいかがなものか、という「自身の内なる声」に抗いきれず、私も自己 PR にトライしました。しかし、いざ書き始めようとすると、行政出身の私には自己 PR (研究実績) などなく、ましてや、「大昔、研究者を目指していましたが大学院を中退し挫折しました」などと書いても、ひんしゆくを買うのが関の山です。あれこれ悩んで、林産試の役割・目的をわかりやすく、そして絞り込んで表現するとどうなるかという観点で以下のようにまとめてみました。

『林産試験場は、木材の可能性を追求し、森林の営みと人々の生活を木でつなぐことを目指しています。人類にとって古くて新しい材料である木材を科学し、人々の暮らしに役立てて参ります。』

まず、林産試を一言で言うのなら「木材の可能性を追求する組織」であるということです。人類にとって木材は、恐らく人類誕生の時代から身近にあった材料であり、我々の生存・生活を支えてきました。その後、急速な科学技術の発展に伴い、人類は数え切れないくらいの多様な材料を手に入れ、豊かな暮らしの実現に向かって突き進んできました。それに伴って、木材は豊かではなかった時代の古い材料であり、もうあまり必要ではないと思う人もいるのかもしれませんが。

しかし、環境重視型社会が到来した今、木材はあらためて人類の生存に必要な不可欠な材料であると言えます。生物材料であるため再生産が可能であること、加工時における環境負荷が小さいこと、光合成により多くの炭素が固定されていること、容易に熱エネルギーに転換可能であること等々、これからの社会を支えていく上できわめて有用な先進材料であります。木材は古くて新しい材料なのです。

林産試には多くの見学・研修の方々がおいでになります。その中で、中高校生、教員の皆さんに、私は「なぜ木材を使うことが必要なのか」ということを熱く熱く語らせてもらっています。

林産試は 1950 年に設置されて以来、一貫して木材の可能性を追求してきました。一例ですが、「カラマツで家を建てる」ことが非常識から常識になったこのことも、木材の可能性追求における大きな成果と考えています。

さて、自己 PR にはもう一つ重要なことを書いたつもりです。「森林の営みと人々の生活を木でつなぐ」と表現した部分ですが、これは、我々の研究対象である木材の背景には必ず森林があり、このことを強く認識しなければならないということです。木材を賢く使うということは、健全な森林を維持することと同意義であると考えます。ユーザーには満足を、企業には利益を、森林所有者には森林づくり（再造林）の意欲をもたらすことのできる木材利用の道を探っていくことが重要です。現在、複数の研究機関が取り組んでいる道総研戦略研究「新たな住まいと森林資源循環による持続可能な地域の形成」もこうした考え方がベースとなっています。まさに「木を見て森を見ず」ではなく、「木を見て森を見る」林産試でありたいと切に思います。

多少抽象的ですが、年頭に当たりあらためて林産試について考えてみました。文中でも若干触れましたが、当試験場は見学・研修者が多く、昨年 4 月から年末まで、およそ 50 団体、700 人もの方々に研究内容や施設を見ていただきました。この大きな数字が林産試への皆様方からの関心の高さ、期待の大きさと解釈し、これからも、様々なアプローチにより木材の可能性を追求して参りますので、皆様方からの変わらぬ力強いご支持をお願いいたします。

最後になりますが、皆様方のご発展とご健勝を心より祈念いたしまして、ご挨拶とさせていただきます。